

記憶と歴史が交差する...

1976年アルゼンチン軍事政権下、突如失踪した母マルタの真相を  
追い求めた息子ニコラス・プリビデラのセルフ・ドキュメンタリー。



**M エム** 監督:ニコラス・プリビデラ

山形国際ドキュメンタリー映画祭 2007 優秀賞受賞

映画『M エム』（アルゼンチン／2007／スペイン語(日本語・英語字幕あり)

## 上映会 × ゲストトーク

日時: 2015年11月8日(日) 13:00~17:10 (開場 12:30)

場所: 立命館大学衣笠キャンパス 充光館 301 教室(地下)

### ▶ ゲストトーク

**石田 智恵** 日本学術振興会特別研究員 PD (東京大学)

専門: ラテンアメリカ研究・文化人類学

研究テーマ: 日系コミュニティを中心としたアルゼンチンの  
移民問題の考察。ナショナリティ、エスニシティ、人種研究

入場無料

## ■ 映画解説

1976年、アルゼンチン軍事政権下。突如消息不明になったマルタ・シエラ。当時6歳だったマルタの息子、ニコラス・プリビデラ監督は、この謎について関係機関や当時の同僚、地下組織運動仲間を訪ねながら、失われた母親像の破片を集めていく。映画はマルタ失踪事件の謎がサスペンス風に描かれているだけでなく、軍事クーデターで多くの人が殺され行方不明になった状況など、アルゼンチンの歴史があぶり出される。記憶を決して風化させない監督の姿勢が感動を誘う。(山形ドキュメンタリー映画祭ホームページより)

## ■ なぜ今、『M』をとりあげるのか

「M」とはマザーのM、母マルタ・シエラの頭文字のM、そしてペロン派ゲリラ組織のモンテネロスの頭文字を意味する。監督、脚本を手がけるニコラス・プリビデラの母マルタは、ニコラスが6歳のとき突然拉致され、そのまま失踪する。当時アルゼンチン軍事政権は、反体制派とみなす3万人ともいわれる市民への拉致を行ったとされるが、ニコラスの母マルタ同様、多くの真相は明らかにされていない。ニコラスは「行方不明になった母親に関して、国と家族が口をつぐんでいる事態をいったんは受け入れた後、私は母の失踪をめぐる“真”の形跡や痕跡の調査に身を投じた」と語る。

それは、一人の少年が孤独に背負ってきた母の「不在」という現実、沈黙されなければならなかった意味を、アルゼンチンの何千、何万もの孤独な群衆の沈黙の中に見出そうとする監督ニコラスの試みといえよう。マルタの「不在」が、マルタを知る他者の「生」のあり様の中で語られるとき、マルタの「生」の姿が浮かび上がるだろう。それは決して遠いアルゼンチンの話ではなく、日本にいる私たちにも試される「不在」と「記憶」の問題である。

今回の上映会では、南米アルゼンチンブエノスアイレスの日系社会を主なフィールドとしながら、アルゼンチンを中心とするラテンアメリカ社会と日本やアジアの近現代の中で、人の存在のあり方、その移動と変遷について多角的な研究を行う石田智恵氏から、アルゼンチンの軍事政権下で起こった惨劇を、世界的／ラテンアメリカ的／アルゼンチン的な時代と社会の文脈から解説いただき、また、その後続くアルゼンチン社会での惨劇への「沈黙」について説明いただきながら、会場との質疑応答や議論を行う。

### タイムスケジュール：

- 13:00 企画説明
- 13:10 映画の時代背景説明（同時代の世界、ラテンアメリカ、アルゼンチン）  
講師：石田智恵
- 13:40 休憩
- 13:45 映画上映
- 16:15 休憩
- 16:30 「不在」への沈黙がもたらすものーアルゼンチン軍事政権下での  
「失踪者」と「記憶」をめぐるー 講師：石田智恵
- 16:50 質疑応答および全体討論
- 17:10 終了

主催：立命館大学大学院先端総合学術研究科・院生プロジェクト「映画を通じて問いなおす『記憶』の形成」  
立命館大学生存学研究センター若手研究者研究力強化型プロジェクト「祝祭の多角的再考から導く共生研究」